

第240回 都市懇サロン レポート	(Webセミナー) 「開発型からアップデートへ」 —ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか—		
講 師	高松 平藏 氏 (ドイツ在住ジャーナリスト)	開催日	令和2年9月9日(水) 18:00~20:00
講 師 プロフィール	<ul style="list-style-type: none"> 1969年生まれ 京都の地域経済紙を経て2002年からエアランゲンを拠点に活動(中心テーマ:都市の発展) 代表著書『ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか』(学芸出版) 		
お話の概要		<p><u>エアランゲンにおける都市のアップデートについて(昔のモノを利用し続けること+現在のニーズに合うように変更を加えること)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●環境問題に対するアップデート <ul style="list-style-type: none"> →1970年代より、モータリゼーションに対する危機感から自転車道の整備、ネットワーク化に取り組む(専用道の新設、白線による分離、車両通行の制限等) →現在では市内の自転車道は道路全体の5割、市内移動者の33%が自転車利用。コンパクトな都市構造であることから通勤通学時の利用も多く、また森の中にも自転車道が整備されていることから運動等の目的で利用する人も多い。 ●中心市街地のアップデート <ul style="list-style-type: none"> →宮殿広場は、モータリゼーションの影響により駐車場として利用が変化した。1970年代からは20年をかけ、近代期と同様の歩行空間として利用を変化させた。 ➢ハード(道路や周辺建物等)は変化しないが、空間の利用方法を各時代で求められる価値に応じて変化させる →→→ <u>都市の「アップデート」</u> ●ドイツのまちの原理となる3つの国民性 <ul style="list-style-type: none"> ・<u>【社会的】</u>…平等、助け合い、福祉といった意識が強い。エアランゲンにおいてはモータリゼーションの時代、交通の平等性が欠如している(一種の人権問題)として自転車政策へと繋がった背景がある。 ・<u>【草の根型デモクラシー】</u>…市民の政治参加が活発で、幼少から自由な主張・議論の重要性が教育される。身近な問題を社会的な議論に発展させる。中心市街地の道路は歩行空間であると共に言論の場である。 ・<u>【補完性の原理】</u>…個人で出来ない事は組織で対応する、組織でも出来ない事はより上位の組織で対応するという思想。 	
意見交換 の概要		<ul style="list-style-type: none"> ●エアランゲンの公共交通の状況はいかがか? <ul style="list-style-type: none"> ⇒民営事業でも公共交通は公共財としての認識が強い。例えばシュタットベルケ(インフラ供給会社)がバス事業に取り組む例があるが、赤字でも事業を継続している。理由として、民間企業においても市街地から車を減らそうとする意識、そして車が減ることで都市の質が高まり、結果的にインフラ事業の生産を上がるという意識が強いことが挙げられる。 ●NPOや市民運動がどのようにまちづくりに関わってくるのか? <ul style="list-style-type: none"> ⇒ドイツと日本で大きく異なる点は、まちの課題を政治の課題にまで昇華させる力が多くの市民に備わっていることである。例えばエアランゲンで築300年の劇場を取り壊そうとする方針が挙がった際には、市内の文化や歴史をテーマとしたNPOが立ち上がり、反対運動を起こして撤回させている。 ●デモクラシーについて、市民の意見が分かれた時、行政の対応は難しいと想像する。 <ul style="list-style-type: none"> ⇒ドイツ人は、主張と議論という過程を重要視しており、また民主主義は全ての意見を採択できないことを理解している。こうした考え方は日本でも重要なと思う。 	
記録者の ひとこと	<p>日本とドイツで最も大きく異なる点は、国民性であると感じた。ドイツ人が重要視する主張や議論という行為は、日本では協調性が無いと見なされる可能性もあり、精神的にも労力がいる。ドイツの国民性を日本に導入するのは難しいが、両国の文化等の違いを中心としたお話は非常に興味深く、一度エアランゲンを訪れてみたいと思った。</p> <p>«都市懇サロン運営部会 委員 安政翔»</p>		